三年古典B　課題2　解答例

博雅の三位が、月が明るかった夜、直衣姿で、朱雀門の前で演奏を楽しんで、一晩中笛をお吹きになっていたところ、同じ博雅の三位、月の明かかりける夜、直衣にて、朱雀門の前に遊びて、夜もすがら笛を吹かれけるに、同じように直衣を着ている男が、笛を吹いていたので、誰だろうと思っている間に、その笛の音は、この世に並ぶものがないくらい、すばらしくさまに直衣着たる男の、笛吹きければ、誰ならむと思ふほどに、その笛の音、この世に類ひなくめでたく聞こえたので、不思議に思って、近づいてみると、まだ見たことのない人であった。自分からものを言わず、相手も何も言わなければ、あやしくて、近寄りて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。我ものをも言はず、かれも言ふこと。

い。このように、月の明るい夜のたびに出会って、（互いに笛を）吹くことが幾夜かになった。となし。かくのごとく、月の夜ごとに行きあひて、吹くこと夜頃になりぬ。

問一	鬼	問二	①	問三	笛	問四	②	問五	さらに ますます	問六	数ヶ月
問七	鬼／素晴らしい笛を持っていた男／見知らぬ男	問八	㋐ ①	②	から	へ	③				
④		問九	そのままになってしまった			問十	亡くなる　死ぬ				

問十一①　尊敬語　②　筆者　から　帝　へ　③　お取り寄せになり（なる）　④　取り寄す

問十二　当時の笛の名手

★鬼＝悪者とは限らない。むしろ、ある種の畏敬（リスペクト）をこめて、神秘的な（破壊的な）能力を持ったスーパースター、といった趣がある。皆さん、「受験の鬼」になってね。

★笛。竹製品もある神性を持っている。竹取物語、舌切り雀。鬼や竹について興味のある人は民俗学の分野を覗いてみましょう。

問五　「直直」ではなく、「猶猶」を取った。

★波線部14打ち消しの助動詞「ず」の活用には皆さん違和感を持つことでしょう。

ず	ず	○	○	○ → 無変化型
（な）	（に）	○	ね	○ → ナ行四段型
ざら	ざり	○	ざる	ざれ（ざれ） → 補助活用

もともとは別の語だった「ず」と「（な）」を一つの語と扱うことにしたため、ややこしい活用表ができてしまった、ということなのです。更に「ず」の下に助動詞を付けようとして補助活用が。

★注　打ち消しの助詞「で」もよく出てくる。これは「ず」＋「て」＝「ずて」が縮まって「で」になったもの。

問十一　敬語
①敬語は3種類。　受験では3種類で可。
②敬意の向きは、地の文ではかならず、筆者から。

まずはこれを即答できるようにしておくこと。